時間を渡る鳥たち

Contemporary Chinese Fictions

Ge Fei
格非
関根謙 訳

現代中国の小説

時間を渡る鳥たち

工业学院图书馆
藏书章

格非
関根謙 訳

Contemporary Chinese Fictions

著者

格　非（Ge Fei）

男。本名：劉勇。1964年8月江蘇省丹徒県生れ。81年、上海華東師範大学中文系入学。85年同校卒業後、教官として留まる。現在中文系副教授。中国作家協会会員。いくつかの作品が英語、仏語などに翻訳出版されている。中国におけるポストモダニズムの若き旗手として国内の評価が高い。

訳者

関根謙（せきね・けん）

1951年福島県生れ。中学時代の3年間を文革直前の大連に過ごす。慶應義塾大学大学院修士課程修了。専攻は中国現代文学。現在慶應義塾大学文学部助教授。著書に『中国の教科書の中の日本と日本人』（一光社）、『基礎固め中国語』（同学社）、翻訳に『胡風追想』（梅志作・東方書店）など。

㊟㊟

©1992年

本日本語版は日本ユニエージェンシーを通じて、

上海版権代理公司との契約により出版された。

時間を渡る鳥たち　**現代中国の小説**

1997年2月25日発行

【著　者】格　非

【訳　者】関根謙

【監修者】村松暎

【発行者】佐藤隆信

【発行所】株式会社新潮社

郵便番号162　東京都新宿区矢来町71　振替00140-5-808

【電話】編集部03-3266-5411　読者係03-3266-5111

【印刷所】凸版印刷株式会社

【製本所】加藤製本株式会社

© Ken Sekine 1997, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。

送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-534702-0　C0397

価格はカバーに表示してあります。

読者へ

中国の近代文学は胡適らの「文学革命」の呼びかけによって始った。長い伝統と強い束縛を持った旧文学の打倒以外に、新しい文学を創り出す道はなかった。さらに、欧米帝国主義（日本を加えて）の国土蚕食、清朝崩壊後の混迷といった現状を前にしては、梁啓超の「一国の民を新たにしようとするならば、一国の小説を新たにしなければならぬ」という言葉、および医学に志した魯迅の「いま必要なのは中国人の体の病気を治すことよりも、心の病気を治すことだ。それには文学によるほかはない」という方向転換の理由は、多くの知識人に共通した認識だったと言ってよい。だが彼らはこの時、小説を否認してきた正統文学観に反逆しながら、魏の文帝流の「文章は経国の大業」という正統文学の効用的評価を小説に期待することになり、文学に対する認識という点では、やはり伝統の束縛から自由ではなかったのである。

一九二〇、三〇年代の作品がわれわれに、ある種のステレオタイプ性を感じさせるのは、その

ためであろう。そして多くの作家たちは、国民党支配の現状に不満だったし、理想の実現を目指すかに見えた共産党に共感を持った。

その共産党の支配が実現した時、自己主張を持つ作家は毛沢東の「文芸は革命という巨大な機械の中の一つのネジクギである」という規定に甘んずることができず、敢然と党の政策を批判した。そこには〝粛清〟という政治的処断が下された。それは文化大革命で極点に達し、批判的意図を持つことが、過去にさかのぼって、苛酷に弾圧された。

想像を絶した苛酷な弾圧は、作家だけでなく、多くの一般の人々をも襲った。だから、文革が終り、鄧小平が登場して開放政策が行われると、文革に対する怨みつらみが作品として次々と現われた。この一時期の作品群を、その初期の作品の名をとって「傷痕文学」という。これらはそれぞれの体験を描いてはいても、いずれも文革批判という点では同じことで、強いステレオタイプを持ったものであった。

だが、その中には、明らかに異質の文学が現われはじめていた。同じ文革を描いたものでも、文革における自己の体験を中心として、いかにそれが非道なものであったか、苛酷なものであったかということを暴露し訴え告発することよりも、そういう環境に置かれた人々が、いかに反応したか、いかに行動したかという、人間存在そのものへの関心に中心が移り、文革はそれを描くための一つの背景にすぎないと思わなければならないような作品が見られるようになった。

垣根が取り払われたことは明らかであった。それぞれの作家が、それぞれの考える文学の世界を、それぞれの手法で展開しはじめた。驚くべき多様で多彩な文学が突如として、――と外の世

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

界からは見えたのだが――続々と発表された。中国にはじめて、政治、教育、宣伝等々の効用を期待される道具としてではなく、文学が文学として評価される時代が到来した。作品に、ある意気ごみを感じるのは、作家たちがそれを実感していたからであろう。

だが、それはやはり、政治や社会の状況が可能にしたものだったのだろう。六・四天安門事件の後、こうした知的昂揚は一頓挫を来たしたようである。さらに鄧小平のいわゆる「南巡講話」以後の経済の急速な大発展は、人々の眼を〝金〟に向かわせ、また向かわざるを得ないような社会状況をつくり出した。この中から、金儲けに転じた作家も出てきているという。

無類の活況を呈している経済も、しょせんは「社会主義市場経済」つまりは共産党独裁下における市場経済であるとすれば、独裁政治が基礎にあるのであって、文学が例外であるはずはない。あの文学の熱気は、趙紫陽が天安門事件で自らの失脚を招いた〝過度〟の自由な雰囲気が産んだ一時的現象であったかも知れない。

だが、強い限定があるにもせよ「市場経済」が自由に基礎を置いたものであらねばならぬことを否定するわけには行かない。今の民衆の生活態度が、毛沢東時代とは様変りであることは、その現われである。とすれば、毛時代にさえ、わずかな隙でもあれば新しい芽を出そうとしたしたたかな文学が、このまま萎んでしまうとは考えられない。過去のヨーロッパやロシアの傑作も、完全な自由という条件の下で生まれたわけではない。中国の新しい文学も根強く生き残って行くはずだ。いささか楽観主義的ではあるかも知れないけれども、全くの主観だとは言えないと思う。

あえて言うならば、特殊な条件による一時的な熱気の中で生まれたものよりも、もっと深く根

を張った本格的な作品の出現を期待することもできるのではないか。ほんの十年ほど前に生まれた、この新しい文学は障害に出会いながらも成長をつづけているのであり、注目に値すると考える。

ここに御紹介する作品は、この文の中で私がしばしば言った「新しい文学」「まったく新しい文学」であり、中国流に言えば「当代文学」である。この当代を、ふつうわれわれは現代と訳しているが、「当代」という字から伝わってくるように、もう少し限定された「いま現在」に近い意味のようだ。それがどんな様相を持ったものであるかということを知っていただけるならば幸である。

飜訳にあたっては、できる限り原文に忠実であることを心がけた。と同時に、飜訳文がややもすると、日本文としては生硬で味気なくなるのは、語学的には忠実であるとしても、文学としては忠実と言えないのではないかという点に留意した。この矛盾の調節のために、訳者たちはそれぞれの訳文を持ち寄って、しばしば会合を重ねている。それでも不行届きの個所があることは避けられないことだろう。何によらず、お気づきの点を御指摘いただけるならば、今後にも生かして行きたいと思っている。御声援を心からお願いする次第である。

一九九七年一月

監修者　村松　暎

はじめに

いま中国では非常に若い世代の作家たちが活躍しはじめている。彼らは何よりも、創作のおもしろさにとりつかれた青年であり、中国伝統の様々な規制からほとんど独立して、自由な創作空間を造り上げてきている。ここに紹介する格非（ゴオフエイ）もその一人である。

格非は雑誌「文学界」（九六年一月号）で桑島道夫訳の「迷い舟」により、初めて日本の読者の前に姿を現した。その幻想的な作風を記憶に留めている読者も多いことと思う。彼の作品は英仏ですでに訳出されて話題を呼んでおり、日本での紹介が遅すぎるぐらいだといってもいいだろう。

本書は格非の代表作「時間を渡る鳥たち」（原題「褐色鳥群」）を中心に、彼の短・中篇小説の四篇からなっている。これらはいずれも彼の作風の特徴をよく物語る作品で、なおかつ現代中国の若い世代の息吹が伝わる作品である。

格非の創作世界を一言で表すならば、「優しさと苛立ち」ということになるかもしれない。優しさの記憶を中核にして、それが時に奪われ、時に自ら失っていくことに対する不安に満ちた苛立ち、これが彼の作品の迫力を形成しているのである。彼はその作品の中で、喪失してしまった優しい温もりの記憶を抱きながら、現実の世界から空想の世界へ、現在の時間から過去の時間へと旅を続けていく。したがってその作品の主体（主人公といってもいい）も常に揺れ動き、人称と時制が現実の壁を突き破って交錯する。この旅の終着点はどこなのか。それは、あるいは出発点と同じ場所かもしれないし、あるいは主体の人格の破壊される地点かもしれない、さらにあるいは……と続くうちに、私たち読者はいつのまにか、私たち自身の記憶をもとに、自分の心の扉に手を掛けているのである。

この過程で格非は実に多様な技巧を駆使して、言語表現の限界を模索している。これは格非が技巧を弄んでいるという意味ではない。格非は激動の中国現代に生を享けた青年として、誠実に自己の精神を見つめ、自分の存在の根源を問おうとしている。「技巧」と写るものは、その作業を言語表現に頼って進めていく以上避けることのできなかった到達点であり、彼の創作精神の必然的な帰結なのである。

このことは題材に関しても言えることで、ここに訳出した四篇の作品は、それぞれまるで異なる世界を描いた独立した小説ではあるが、互いに密接な関係を持っており、ある作品に他の作品を解く鍵が秘められていたりすることもあるのである。別な言い方をすれば、彼の作品は一つの大きなテーマによって貫かれた小品の集合体であり、有機的につながりあった長篇の作品と見る

こともできるだろう。こうして創りあげられる巨大な迷路のような世界に、現代中国の苦悩する世代の精神が様々な旋律をもって共鳴しているのである。

ところで、現代中国文学というと、「革命」「理想」「真実」等々のキィーワードが目の前を飛び交い、なにか姿勢を正して読むのが当然といったイメージが定着しているようだが、この作品集はそういう肩の力を抜いて読んでいただきたい。特に「オルガン」（原題「風琴」）は抗日戦争の時代を背景にしているので、すぐさま先程のキィーワードが登場しそうで、訳者としては大変気掛かりである。また「愚か者の詩」（原題「傻瓜的詩篇」）の題材になった精神病院にしても、中国の精神病治療の立ち遅れや人権無視の状況の告発などがテーマでないことを、敢えて再度言明しておきたい。この作品集に描かれた世界はすべて格非の心象風景であり、何かの社会変革の運動といささかのつながりも持つものではない。格非はただ、この荒涼たる心象世界の果てに見えるかもしれぬ答え――存在の意味――を求めて彷徨を続けているだけなのである。だから格非はそのさすらいの途上で生んだ作品の中で、自分の周囲の事物を鋭く抉り取ってシニカルな描写をちりばめてはいるが、同時により酷薄な筆致で自己の内面をためらうことなく切り刻んでいるのだ。

最後になったが、格非の文章は実はたいへんに難解である。中国人ですら意味のよくわからないところがかなりあり、中には格非の文章を前にまったくお手上げという中国人もいたほどである。翻訳に当たって私は細心の注意を払って誤訳を排したつもりだが、原文の意味を再生し、その雰囲気を甦らし得たかどうかは疑問である。いや語弊を恐れずに言えば、日本語としての読み

易さが、かえって原文の複合的な世界を壊してしまったかもしれない。しかしいずれにせよ、拙訳を通して格非という若い作家のパワフルで新鮮な文学の雰囲気はわかっていただけることと思う。

訳　者

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

時間を渡る鳥たち◆目次

読者へ　1
はじめに　5
愚か者の詩　15

オルガン――81
夜郎にて――119
時間を渡る鳥たち――159
訳者あとがき――中国現代小説の迷宮 206

装幀　新潮社装幀室
装画　平野仁文

時間を渡る鳥たち

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com